

ひられて居る。學名にアンダマン群島にでも居さうな種名が與へられて居るのは移入の不知にもとづいたもので、誠に不仕合せなことである。吾等はせめて俗名で訂正してやる譯である。而してブレームのチーアレーベンのレーベンマカクは此の兩方をごつちやにしたものであるから、大體よい本乍らも茲で盲従をすることは出来ない次第である。(1932, VIII, 25)

## 擇捉島の鼠禍に就いて

徳 田 御 稔

京都帝國大學理學部動物學教室

擇捉島は千島列島中最大の島であり、面積 2408 平方 km、北海道の東北端根室より東北の方向に色丹、國後島に次ぎ、約 100 哩の距離に横はる東北に細長く延びた島である。更に東北には擇捉水道を隔てて得撫島に隣る。氣候風土はほぼ緯度を同うする北海道の北見、根室と大差なく、夏期の最高温度 30°C、冬期は全く雪に包まれ最低零下 20°C を超える。

著者は擇捉島の野鼠採集の目的で、同島の留別に昭和七年七月二十九日に上陸し、爾來 8 日間を、西海岸の留別、紗那及び東西兩海岸の中間に位する瀬石等に於て、専心採集に努めたのである。所が野外に於て得たるものは總てドブネズミ *Rattus norvegicus norvegicus* ERXL のみであつた。前述の留別及び紗那の附近は丘陵地で草よく繁り、ハタネズミ、ヤチネズミ類の造巢の地として好適と目されたのであつたが、同地にはそれらの巢の一つをも発見し得なかつた。次に丘陵地に續く 2m 餘の熊笹の中にシコタン松の點々とする叢林地帯に trap したのに、當地帯より得たものが悉くドブネズミであつたのである。

尙著者の持参した trap は總て小型のもののみであつた爲、鼠が餌に觸れたこと明であるに拘らず捕へられなかつたもの多く、又捕れたドブネズミはパネにより鼻を打たれ斃れたものである。著者は以上のことに依りドブネズミが野外に多數棲息することを推察し得たのであつたが、所期の目的である當地固有の野鼠は更に收獲なく、その棲息すら疑はれ、いささか失望の状態にあつた時、偶々島民より耳にした往時に於けるドブネズミの繁殖劇増の歴史によりヒントを得て、或はこの貪食強大のドブネズミの増加の爲に小形なる他の固有の野鼠は驅逐され絶滅に到つたか、又は非常に少數となつたのでないかと思ひ、本島に永年在住する下記の諸氏に當時の模様を聴取した。

留別郵便局々長 三上宅市氏      元營林区主事 間宮圭太氏  
留別驛 遞 佐藤政平氏      青年訓指導員 江田条吉氏

上記の諸氏並に數多の島民の傳へるところを綜合すれば、擇捉島には明治に 2 回、大正に 1 回、都合 3 回に亙つて鼠禍があつた。尤も島民の多く知つてゐるのは大正の 1 回のみであるが、聞くとおりに依れば、明治の 2 回は大正の際に増して甚しいものであつたと。(下記の年代は記憶に依つたもの故正確を保證し得ず)。

最初に大正十二年の鼠禍を聞くに、當時劇増繁殖した鼠は大形の鼠で（大き、色、その他よりドブネズミであることを疑はず）夏より秋にかけて、おびただしい數に増加し、山地にあつては到る處に穴を穿ち、熊笹は爲に地下莖を損ぜられて、一面に枯死したと、又野外に於て鼠の餌となり得るものは悉く侵食され、僅少なから島民の栽培せし作物は皆無となり、遂に鶏は犯され、卵は盗まれ、猫は眼前の鼠を捕得ず。特に夜に入つては其の活動めまぐるしく、人家の附近では、幅の廣い立て板をしかけて之を倒せば一時に二三百の鼠を殺し得たといふ。當時島民は之を渡り鼠と呼び、海を越えて他島から來つたものと信じた。その理由は夏期に用ひるマスのタテ網には常に五六百の鼠の死骸が掛り漁夫は之をマスの大漁と誤つたとのことに依る。大正十二年の當地の天候は順調であり作物は良好であつたが、漁獲は不良と聞く。尙當時鼠の毛皮は價格五錢位に買賣されて島民は盛に皮を剥いだ。用途は冬期の防寒用耳覆とする。又當時繁殖した鼠の中には Albino 及半 Albino rat が相當多數混つてゐたことを島民がひとしく目撃してゐる。

溯つて明治四十二年の鼠禍を聞くに、本年は天候は大正の際の如く順調であつたが、漁獲は著しく豊富であつたと。殖えた鼠の數は大正の時の比でなく、夜間などは戶外を歩くのに足の踏み場に窮したといふ。當時所用で内保から留別へ徒歩で往來した人の語るところでは鼠の氾濫は全島到るところであつた模様である。

又更に溯つて明治二十六年の鼠禍は四十二年に比し甲乙なかつたといはれるも、當時の天候その他に就いて詳細に記憶する人がない。明治の兩年度に於ても島民は同様之を渡り鼠と呼び、他島より泳ぎ來つたものと解した。

以上三回の増加を通觀すれば、増加は必ず七月以後に起り、即島民はこの期を呼んでマス時と稱する。又いづれの時に於ても増加は翌年迄持ち越されることなく、秋期に到つて鼠は食物缺乏の爲に共喰をなし、死體は處々に横はり、冬期に到つて全く影をひそめ、翌春は常態に復するを常とする。劇増をなした年の天候は一般に順調の如く觀察せらるるも、信賴し得る因果は探知し得ぬ。

以上の如く擇捉島には顯著な鼠禍が再三あつたに拘らず、未だ一般に知られぬのは、擇捉島には見るべき森林なく、又島民は一般に作物を作ること少く、爲に直接に深甚の被害を蒙つた人のなかつた爲と解する。

尙平年にあつても、夏期に家鼠が多く野外に棲息することは廣く島民の認めるところであり、サケ及マスが産卵の爲に河を溯る期に到ると、鼠は多く河畔に集り、群るサケ及マスの腹に喰ひつき之を殺すことを習得してゐる。又島内のマスの孵化場は鼠の襲來を避ける爲に金網を以て固められてゐる。

以上を要約すれば、擇捉島には再三の鼠禍があつた爲、他の固有の野鼠は驅逐され、絶滅に到つたと直に斷定するのは勿論早計のことと考へるが、今後の報告を待つて著者の推察は取捨さるべきものと信ずる。あはせて未だ一般に傳へられぬ擇捉島の鼠禍を島民の記憶の新なる内に聴取し、之を記して、本島に今後採集をこころみる人々の参考に資する。